

《研究ノート》

キリスト教系中等学校の英語教員に 関する研究

—青山学院の場合—

保 坂 芳 男*

1. はじめに

日本の英語教育の歴史を語る時にキリスト教系の学校を抜きにしては語れない。明治期に創立され現代に於いても定評のある英語教育を行っている学校として、立教学院、青山学院、明治学院等を挙げることができる。

それぞれの学校は主に外国人宣教師によって創設され、徐々に質の高い英語教育が評価されるようになった。一方で明治後期からの日本の右傾化に伴い、明治32年の文部省訓令第十二条を初めとする様々な圧力に悩まされながら今日の地位を築いてきた。本研究ではその過程を英語教員に焦点を当てて追ってみたい。保坂（2015）では立教学院を取り上げたが、今回は青山学院中等部を取り上げる。

2. 沿革

青山学院¹⁾の男子教育の歴史は、2つの源泉から始まる。1つは、明

*専修大学文学部兼任講師

治11年に東京に創立された耕教学舎であり、もう1つは、明治12年に横浜に開設された美會神学校である。明治15年、耕教学舎から改称した東京英和学校と、美會神学校の合同が行われ、翌16年に東京英和学校と改称した。

R. S. Maclay が校長となった。

明治18年に東京英和学校で、神学科と普通科が分離する。その普通科の中に5年制の予科を置く。それが中学部の始まりと言われている。その後、明治22年に予備学部、明治29年に尋常中学部と改称した。そこで初めて官公立高等諸学校との直接、連絡がつながった。その翌年、明治30年第一回卒業生4名を出した。

しかし明治32年に文部省訓令第十二号が出され、宗教教育、儀式が禁止された。議論紛糾した結果、文部省に左右されず独自の教育方針を以て進むことを決め、明治33年3月に尋常中学部を廃止した。そして、新たに中等科を設置したが、残留したのがわずか1名となったクラスもあった。立教中学とは異なり、青山学院中学部は、明治学院や同志社と同様に、徴兵猶予・上級学校入学資格という特典を放棄し、独自の教育方針を以て進むことに決めた。

明治33年、普通高等部を高等科と改称し英語科中等教員の便宜を図った。キリスト教系の専門学校で初めて文部省より英語科中等教員無試験検定の認可が下りた。「英語の青山」の実力が世間に評価された結果であった。

明治34年、中等科は、官公立中学校と同等以上として認可された。この時に徴兵猶予の特典は再び認められた。しかしながら上級学校への入学等には依然差別があり、完全に差別がなくなったのは、大正2年の文官任用令であった。大正4年、中等科を中学部と改称、大正5年には、定員を増加して600名とし、発展の時代に入った。

3. 教育の特色（英語教育を中心に）

（1）設立当初の教育課程

私立青山学院尋常中学部は、明治18年に東京英和学校普通科内に認められた予科を発端とする。明治22年に予備学部と改称した。明治27年に学科を改正し、尋常中学校に近いものにした。明治29年にさらに学科の変更を行い、尋常中学校設備規則に従い、東京府知事より認可を得た。4月より、尋常中学部と改称、修業年限を5年とし、5学級をおく。尋常中学部改称当時の英語の教育課程は、資料1の通りである。

資料1 教科目及教授時間（『東京の中等教育一』, pp.46-47）

	一年	二年	三年	四年	五年
英語	読方、訳解	読方・会話・書取・訳解	読方・会話・書取・作文・文法・訳解	読方・会話・書取・作文・文法・翻訳	読方・書取・作文・文法・翻訳
時間数	6	7	7	7	7

明治27年に井上毅文相は、第二外国語を廃止して英語・国語漢文・数学の時間数を増やすために「尋常中学ノ学科及其程度」を改正したが、青山学院の時間数はそれに準じている。特徴として、4、5年次は、訳解から翻訳に名称が変化している。明治30年当時の教科書は資料2の通りである。これによると、4年次以降は教科書に読本だけでなく伝記や自伝等の原書を使用していることからかなり高度な教科書を用いて翻訳が行われたものと推察できる。

資料2 尋常中学部学科課程並教科書概要（『一覽』²⁾，1897，巻末折込）

1年	2年	3年	4年	5年
ナショナル読本 一、二 スウ井ントン 一、二	同左 三、四 同左 二、三	チェンバー氏歴史 読本三、四	ユニオン読本 四 マコーレー氏 フレデリック論 スウ井ントン氏 文法論	スウ井ントン氏読本 五 フランクリン氏自叙伝 ミード、ケロッグ氏文法

一般的には、ナショナル読本四は4年次用の教科書である。それを2年次に終えてしまうなどレベルの高い英語教育が行われていたことが窺われる。

また、当時の進級規定が、「各科目50点以上、全科目の平均点は70点以上を進級させる」とあり厳しいと思われる。³⁾

(2) 文部省訓令第十二号の対応と教育課程

明治32年8月文部省は訓令第十二号を発令し、宗教と教育の分離を強制した。条約改正の一端として、治外法権の撤廃から5年後の明治33年から外国人の雑居が認められる際に、キリスト教が急速に普及する危険性を察知して発令した訓令であった。当時のキリスト教系の男子中学は、尋常中学の認可を受けることで、上級学校進学と徴兵猶予の二大特典が与えられていた。その特典がなくなることは、学校の存続にも関わる重要な事柄であった。青山学院は、建学の精神を死守することに決め、各種学校の扱いとされる道を選んだ。しかしながら、しばらくして、特典は回復され、実質的には、ほとんど影響は出なかった（『日本近代教育史事典』，p. 435）。訓令十二号への対応に関する詳細は、『青山学院九十年史』（pp. 240-293）が詳しい。

青山学院は明治学院などと共に特典放棄、宗教教育の続行を決めた。明治33年に尋常中学部を廃止して、新しく「中等科」とし、高等普通部を「高等科」と改称した。前述したように一時的にはかなりのダメージを受けた

が徐々に特権が回復された。

当時中等科の教育課程を見ると一種の開き直りの感じさえする。特権は剥奪されても信念を貫くこと、英語のできる生徒を育てることで社会的な評価を高めようとしたことが当時の教育課程から窺われる。

資料3 英語の教育課程（明治35年）（『一覽』, n.d., p.22）

	一年	二年	三年	四年	五年
英語	読方, 書取, 会話, 訳解	同左	読方, 会話, 書取, 訳 解, 作文, 文法	同左	同左
時間数	8	9	8	8	8

各種学校時代の明治35年の教育課程は資料3のとおりである。各種学校扱いになって、英語の時間数を増やした。また、会話の授業を1年次から5年次まで行うことで実用的な英語教育を推進しようとした意図も窺える。

当時の青山の英語教育が総合的に高く評価された結果、明治33年の9月には、高等科卒業生には、キリスト教系で初めて英語科中等教員無試験検定の認可が下りた。

(3) 教育経験豊かな外国人教員

青山学院の特徴は教育経験豊かな外国人教員の多さである。東京英和学校の初代総理であった R. S. Maclay は、「日本に送る宣教師は、必ず高等教育を受け、教養と学識を備えた者でなければならない」（『青山学院資料センターだより』, p.5）と、機会あるごとにアメリカのメソジスト宣教局に書き送った成果であろう。

当時の中学の外国人教員の多くが宣教目的を主として英語を教えていたのと違い、青山学院の外国人教員の多くは教員免許や教職経験を有するものが多い。英語以外の科目を教えた場合もあった。また、英語の教科書の編集や文法研究に意欲的に取り組んだ教員もいた。

『来日メソジスト宣教師事典』を参考に、明治期以降に勤務していた主な外国人教員と教授経験等を示すと以下の通りになる。

B. Chappell (1852-1925) [1889-1925]⁴⁾ 来日前はイギリスの高校の校長。

M. S. Vail (1853-1923) [1882-1894] 東京英和学校の人文文学部長や神学部長を歴任。

来日前はオハイオ大学予備科の科長，大学でドイツ語とギリシャ語を教える。

J. S. Vail (1859-1948) [1882-1941] (M. S. Vailの妹) 中学部，高等学部で英語，ドイツ語，朗読法，音楽，聖書を教える。

M. B. Moon (1874-1935) [1913-1931] 東京のアメリカンスクール，正則英語学校，府立第八中学校[1931-1935]でも教える。

E. T. Iglehart (1878-1964) [1904-1909] [1914-1941] 戦前は男子中学部長，専門部長。
英語の教科書⁵⁾を編集。

R. P. Alexander (1862-1940) [1893-1897] [1907-1940] 博識で知識旺盛な文法学者。
二ノ岡（御殿場）夏期宣教師村の創始者の一人。

他にも『東京都の中等教育一』に設立当初の外国人教員の履歴が載っている。それによると，中学部長を務めたJ. O. Spencer (1857-1947) [1883-1899] は，ペンシルベニア州の教員資格を有していた。同様に，R. P. Alexander は，来日前にプリンス・エドワード島で公立小学校の教員をし

ていた (p.64)。

さらに、『会報 第十二号』(1909)には、ベリー、アイグルハート、バーテルス、デビソンの四氏が文部省より英語教員免許を交付されたという記述 (p.22) があるが確認できていない。

他にも M. H. Buchanan (1869-1922) [1904-1905] は4年生に会話を教える一方で柔道を習っていた。同様に、de Havilland も、「後に特許弁理士をしたデハヴィランドという英人にも会話を教えて貰った。四年生に俳句の英訳などやらして、鐘が鳴ると例の襖を開けて、口三味線で何やら端歌を歌って引き上げて行つた」(『青山学院五十年史』, p.200) と、生徒の回想にあるように日本文化に大いに関心を持っていた。

外国人教員の中で伝記が残されているのは、M. B. Moon (1874-1935) である。彼女は、「ミス・ムーン先生の会話は、色々な意味で異彩を放っていた。会話と先生は離すことができないと共に、バイブルクラスと先生も離す事の出来ないものである。クラスの大半は日曜日毎にこれに出席して課外の英語の力を養った」(『青山学院五十年史』, p.218) と多くの生徒が回顧するほどユニークで熱心な先生であった。伝記によると、日本語はできるが生徒の為にならないということで絶対に使わなかったこと、学生の名前をよく記憶したことが記されている。Moon は、派遣された宣教師ではなく篤志宣教師であったが、その熱心でかつ感激と興味にとんだ聖書講義は常に多くの聴衆を引き付け、「東洋一であるとまで、人々から賞賛」(『ムーン女子小傳』, p.19) されたほどであった。

(4) 優秀な日本人英語教員

青山学院と言えば外国人教員は多いことで有名であったが、日本人教員の中にも実力のある教員が沢山いた。設立当初にいたのは、松島剛 (1854-1940) である。松島に関しては、『青山学院九十年史』(pp.210-212) が詳しい。彼は開成所、慶應義塾等で英学を修め慶應義塾幼年寮や茨城県

第一中学校で英語を教えた後に、埼玉県不動岡中学校の校長を経て東京英和学校教授となる。中学では、英語と地理を週18時間教えていた。彼は、『社会平衡論』の翻訳者で自由民権論運動家に大きな影響を与えた。彼は、多くの英語教科書を編集しているが、その価値は高く、「後年の best-seller といわれた神田乃武のクラウンリーダーズは、彼の教科書の模倣であるとは、神田が自身で述懐している処である」（池田，p.10）ほどであった。また、大正4年に高等科を改組し英語師範科を新設して継続的・組織的な英語教員養成の端緒を開いたのも彼の計画であった（『青山学院九十年史』，p.211）。

他に生徒の回想が残されているのは、和田正幾^{わだせいき}（1859-1933）である。和田の経歴に関しては、『青山学院九十年史』（pp.75-76）が詳しい。彼は、開成学校で化学を専攻した。明治14年から前身の耕教学舎で、数学や物理、化学や英語等を教えていた。「生徒がへまな答でもすれば一人でクスクス笑いながら英文法の講義」（成田，p.193）をしていたようである。謙遜寡黙な人格者である一方で、彼の学識の高さは、斉藤秀三郎や夏目漱石らが敬服していたと伝えられている（『青山学院九十年史』，p.76）。和田は、高等科でも教え、「三年になつてから教員志望者は時々中等科に出て教授法の演習をさせられ、明治三十九年に卒業すると云ふ年に中等科五年」（『青山学報』，1933，p.3）の授業に連れて行き、今でいう教育実習を行わせた。和田は、一冊の著作も残してはいないが、英文法の大家として有名で、青山学院高等科の卒業生で英語の教員になったものは、分らないところがあると、和田に聞くことができる強みを持っていたとの回想がある（『青山学報』，1933，p.4）。

塩谷栄は卒業生であり教員でもあった。青山学院に残されている塩谷の履歴書によると、明治6年に出生⁶⁾、明治15年に東京英学校に入学、明治21年に東京英和学校を卒業したとある。着任と退任の記録は履歴書にはない。明治39年当時は、第六教員養成所教授、学習院、明治大学、女子英学

塾でも教えているとの記述がある（『会報 八号』, p. 16）。『青山学報』（1940, p. 3）によれば、昭和15年に文学部を退官している。塩谷に関しては、大村・高梨・出来（1980）にも記述が残されている。塩谷は、徳富蘆花の『不如帰』の英訳者として有名で、*The First Reader* や *Girls' New Readers* などの教科書の著者としても知られる（pp. 231-258）。彼は青山学院だけでなく、東京外国語学校講師、東京高等師範学校教授も務めた（p. 130）。東京高等師範学校時代の様子に関しては、福原他（1978）が詳しい。

外国人教員と日本人教員との連携も密に図られていたようである。『会報 二十号』によると、大正3年5月20日に C. S. Davison（1877-1920）は、自宅で中学の教員の有志と勉強会を始めた。以後毎週火曜日に英語研究会を開催した（p. 51）。大正6年当時の輪読教科書は『トム・ソーヤの冒険』であった。校友会報編集部は、参加教員の熱心さはもちろんであるが、デビソン夫妻の献身的な態度も称賛している（『会報 二十一号』, p. 38）。

（5）文学会

生徒たちの英語力向上に大いなる効果を発揮したのが文学会であると思われる。その様子は、『青山学院五十年史』（pp. 360-363）や『会報』が詳しい。

第一回文学会は、明治24年4月25日に開催され、日本語及び英語を用いて語学及び文学の演習を行った。明治26年10月16日に組織を新たにし、日本ではじめて『万葉集』の英訳を出版した岡田哲蔵教授を会長に選び、毎月1回開催することにした。以後、盛大となり、大正3年頃まで継続され、久しく青山の名物と唄われた。『会報 第十九号』に、大正3年2月10日に行われた文学会の様子が詳細に書かれていたので紹介する。

雪の降る午後6時に開演した。2番目に英詩「カサビアン」の暗唱を行った中学4年生の石原君に対して、「あの悲壮な詩を誦しきく者をして一

滴の涙をもやうさするには誠に相応しいものであった」と絶賛した (p. 69)。次に英語の劇が続く。2つ目の劇「カアディの裁判」は、ミス・ムーンが指導した。中学の1, 2年生にこれをさせたことに会報担当レポーターの武藤は感銘を受けている。ミス・ムーンは、他に劇「リチャード王とロビンフット」の指導もしたが、「あんなにもよくやつてのける中学生は何処を探してもあるまい」(p. 71)と絶賛した一方で、「自惚は最悪の誘惑である」と武藤は戒めている。

高等科の生徒と合同で行った場合もあったようである。教員も積極的に参加したようである。アイグルハート夫人の独唱「A Spring Song」もあり、学院全体の英語力を高める恒例の行事であったようである。

この文学会は時には中学だけの時もあつたり、中断があつたりしたようであるが、「『日本』新聞が語学衰退今日、ここのみは例外であると評したのも尤もである」(『会報 第八号』, p. 46)と書かれているように、日本国内が徐々に右傾化する中でも盛んに行われていたようである。また、卒業生だけの文学会も行われていたようである(『会報 第十号』, p. 31)。

4. まとめ

青山学院の歴史を振り返ると、「英語の青山」と呼ばれるようになるまでになった英語教育の充実ぶりを時代と共に追うことができる。設立当初から、多くの外国人教員を配し、彼らの多くは教育経験が豊富であつただけでなく教員免許を有する者もいた。その外国人教員と日本人教員は、英語研究会を開催しお互い切磋琢磨した。中学部だけでなく学院全体の行事として文学会が行われ、学院全体で生徒の英語力向上に努め、「英語の青山」という国内での評価が高まった。

注

1. 青山学院の起源については、正式には大学 HP 等で記されている通り、昭和2年に合併した女子系の学校も含まれ3起源とすべきであるが、本稿では、旧制の男子のみの中学部を研究対象としているので、2起源とした。
2. 『青山学院高等普通学部尋常中学部一覧』を、本文中では『一覧』と略し、詳細な書誌情報は参考文献で示すことにする。同様に校友会報は単に『会報』と略す。
3. 例えば立教中学の場合は、「各科目40点以上、全科目の平均点は60点以上を進級させる」（『東京の中等教育二』, p. 26）とある。同様に私立明治学院尋常中学は、「各科目50点以上、全科目の平均点は60点以上を進級させる」（『東京の中等教育二』, p. 51）とある。それらと比べると青山学院の進級規定は厳しいと思われる。
4. B. Chappell (1852-1925) [1889-1925] は、1852年に生まれ1925年に死去、その内、1889年から1925年まで青山学院に勤務したという意味である。
5. E. T. Iglehart には、山田惣七との共著、*NEW MODEL SUPPLIMENTARY READERS*（泰文堂出版、昭和2年文部省検定済）がある。彼は、音声学の専門家で、「青山のパーマー」と学生から愛称されていた（『日本キリスト教歴史大辞典』, p. 10）。
6. 本人の回想によると、明治4年12月31日の出生が正式であるらしい（福原・桜庭・大村, p. 239）。

参考文献

- 青山学院編（1932）. 『青山学院五十年史』非売品。
 青山学院編（1965）. 『青山学院九十年史』非売品。
 青山学院（1897）. 『青山学院高等普通学部尋常中学部一覧 自明治三十年至明治三十一』, 非売品。
 青山学院 (n. d.). 『私立青山学院高等科中等科一覧 自明治三十五年至明治三十六』, 非売品。
 青山学院（1933）. 『青山学報』第百十二号, 青山学院校発行。
 青山学院（1940）. 『青山学報』第百六十五号, 青山学院校発行。
 青山学院校友会（1906）. 『青山学院校友会会報 第八号』青山学院校友会発行。
 青山学院校友会（1907）. 『青山学院校友会会報 第十号』青山学院校友会発行。
 青山学院校友会（1909）. 『青山学院校友会会報 第十二号』青山学院校友会発行。
 青山学院校友会（1914）. 『青山学院校友会会報 第十九号』青山学院校友会発行。
 青山学院校友会（1914）. 『青山学院校友会会報 第二十号』青山学院校友会発行。
 青山学院校友会（1915）. 『青山学院校友会会報 第二十一号』青山学院校友会発行。
 青山学院資料センター編（2013）. 『青山学院資料センターだより』9号, 青山学院資料センター発行。
 池田哲郎（1969）. 「紀州英学史素描」『英学史研究 <改題第1号>』日本英学史学会, pp. 1-15.

大村嘉吉・高梨健吉・出来成訓（1980）.『英語教育史資料 3 英語教科書の変遷』東京法令出版.

ジャン・W・クランメル編（1996）.『来日メソジスト宣教師事典』教文館.

東京都公文書館（編）（1974）.『東京の中等教育一』,東京都情報連絡室情報公開部都民情報課.

東京都公文書館（編）（1974）.『東京の中等教育二』,東京都情報連絡室情報公開部都民情報課.

成田潔英（1932）「中学部の回顧」『青山学院五十年史』非売品, pp.192-198.

日本キリスト教歴史大事典編集委員会編（1988）.『日本キリスト教歴史大事典』教文館.

日本近代教育史事典編集委員会編（1971）.『日本近代教育史事典』平凡社.

野辺地天馬（1935）.『ムーン女子小傳』新報社.

福原麟太郎・桜庭信之・大村嘉吉監修（1978）.『ある英文教室の100年』大修館.

保坂芳男（2015）.「キリスト教系中等学校の英語教員に関する研究—立教学院の場合—」『人文・自然・人間科学研究』第34号, 拓殖大学人文学研究所発行, 印刷中.